

東京2020に出場したOB・OGチャレンジャーの慰労会では、山本選手らが浅見名誉審査委員長らに大会の様子を報告。「YMFSファミリーとしてますます頑張りたい」とさらなるチャレンジを誓った

コロナ禍のオリンピック・パラリンピックで チャレンジャーOB・OGが躍動。 梶原選手が銀メダルを、 堀島選手が銅メダルを獲得。

東京オリンピック・パラリンピック2020は新型コロナウイルスの影響で1年延期され、原則無観客での開催となるなど前例のない大会となった。最大の課題とされた感染対策ではのべ100万件を超える検査の実施や、会場・選手村・移動などで対策を徹底し、大会組織委員会は「安全・安心な運営ができた」と振り返った。

組織委員会は、感染対策に加えて暑さ対策などのノウハウや、スケートボードなど新たな競技の導入、また多様性と調和、持続可能性に関する取り組みなど、東京2020によって得た知見を「東京モデル」として今後の大会に継承したいと総括した。

この両大会で、オリンピックには羽根田卓也選手(カヌースラローム)と梶原悠未選手(自転車オムニアム)の2名が、パラリンピックには4大会連続出場の山本篤選手(陸上)をはじめ、網本麻里選手(車いすバスケットボール)、鈴木徹選手(陸上)、辻紗絵選手(陸上)、友野有理選手(卓球)の5名のOB・OGチャレンジャーが出場し、梶原選手がオリンピック自転車競技で日本女子選手初となる銀メダルを獲得した。また、第6期生の椿浩平選手(トライアスロン)は視覚障害選手の伴走者としてパラリンピックに出場し、米岡聡選手の銅メダル獲得を支えるなど、歴代の多くの助成対象者たちがこの大会で活躍した。

木村隆昭理事長は、大会終了後に開催した慰労会で「世界の舞台で戦った皆さんの経験は、YMFSが応援する未来人材にとって必要不可欠なもの。チャレンジャーの模範たる皆さんも、末永くファミリーの一員として私たちのスポーツ振興に力を貸していただきたい」と挨拶した。

年が明けた2月には、北京オリンピック・パラリンピック2022が開幕した。北京大会にもOB・OGチャレンジャーの堀島行真選手(スキーモーグル)がオリンピックに、本堂杏実選手(スキーアルペン)がパラリンピックに出場し、堀島選手が銅メダルを獲得した。

2021/2022 令和3年度

東京オリンピック・パラリンピック2020が、1年遅れて無観客で開催された。日本選手団はオリンピックで史上最多の58個、パラリンピックで51個(史上2番目)のメダルを獲得した。また、その半年後には北京オリンピック・パラリンピックが開かれ、両大会でチャレンジャーOB・OGが躍動した。

スポーツチャレンジ助成事業

コロナ禍の影響により、面接選考や中間報告会、年度末のスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングはすべてオンライン開催となった。一方で社会・経済活動の再開も進み、チャレンジャーの活動も活発になった。





■ 2021年度(第15期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	43件	15件	1,596万0,000円
研究助成	53件	16件	1,469万0,000円
計	96件	31件	3,065万0,000円

スポーツチャレンジ体験事業

■ ジュニアヨットスクール葉山

コロナ禍による断続的な休校や大会の中止も相次いだが、再開後はコロナ対策を行った上でスクール運営を行った。

■ セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、参加者の安全を最優先して 大会を中止した。大会中止は3年連続となった。

■スポーツ教材の提供

全国772校・団体から申請を受け、厳正な抽選を経て、計120団体にスポーツ教材を提供した。従来のタグラグビーセットに加え、ユニバーサルスポーツ体験を促すボッチャボールセットを新たに追加した。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト 18,507作品の応募があり、審査会を 経て、入賞23作品と入選353作品を 決定した。



スポーツチャレンジ啓発事業

■ 第14回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



[功労賞] 伊藤 裕子 氏障害がある子ども向けスイミングスクールでだれもが楽しく学べる機会を提供



[奨励賞] 山下 良美 氏 女子国際主審・サッカー1級審判員として 国内外の試合で主審担当 スポーツ界における女性活躍を牽引

■調査研究

シンポジウム「パラリンピック報道とパラリンピアンの認知度における社会発信の変化」をオンラインにて開催した。また、トップスポーツチームが活動拠点とする6つの地域を選定し、ファン・サポーターの特徴について調査を行った「トップスポーツと地域住民に関する調査」報告書にまとめて発行した。